

最優秀賞 小学生の部

へん見で人をきずつけないために

西郷小学校 5年 野原 珠実



体から管が何本も出ていて、点てきや機械につながれている。さらに自分で歩けず車いすに乗っている。そんな小学三年生を見たらどう思うだろうか。それは、二年前のわたしのすがただった。

わたしが入院して、そのすがたでろう下にいた時、すれちがう人からのつきささるようなし線を感じた。わたしはその場からにげ出したいくなった。小さいころから通っている病院だ。いつもはこんなにジロジロ見られたりしない。点てきや管につながれているだけで、どうしてジロジロ見られてしまうのだろう。

わたしの母はきん肉の病気でつえをついている。そのため、外出した時に周りの人からジロジロ見られることがある。

「若いのにつえをついている。」

と母を見てコソコソ話している人も見たことがある。前まではジロジロ見られることなど平気だと思っていたけれど、車いすを経験して、はじめて母の気持ちが分かった。見た目がちがうだけでジロジロ見られることが、こんなにつらいなんておどろいた。

学校の授業でしょう患者し設の方と交流した時、顔がゆがんだ人がいた。「こわいな、関わりたくないな」と思っていたが、話をしてみたらすごくやさしかったので、もっとなかよくなりたと思った。

この時まで、わたしはへん見をもっていないと思っていた。しかし、顔がゆがんだ人を見て関わりたくないと思ってしまった。人を見た目で判断してしまった。それをきっかけに、わたし自身もへん見をもっていったことに気づいた。とてもショックだった。

一学期に、支えん学校との交流があった。わたしは、「見た目で判断しないように気をつけよう。」という気持ちでのぞん

だ。その時同じグループになった支えん学校のA君が、突然つばをつけてきた。わたしは、つばをつけられるのがいやだと思って近よらないようにした。「なんでわざとあんなことをするのだろう」とぎ間に思った。人のいやがることはやってはいけないと教わらなかったのだろうか。

帰ってから母にA君のことを話したら、「しょう害のある子がつばをつけるのは、色々な理由があるんだよ。相手のいやがる反応をうれしく感じる子もいるし、もしかしたら交流活動がストレスになっていたかもしれないし。理由によって接し方がちがうから、先生に聞いてみるといいよ。」

と教えてくれた。わたしは交流の時のA君の行動だけで、絶対わざとだと決めつけてしまった。そして、あからさまにいやそうな態度をとったせいで、A君をきずつけたかもしれないと思った。とても後かいした。

でも、交流活動では、いやなことだけではなくうれしいこともあった。A君にわたし達のプロフィールが書かれた自こしょうかいカードをわたしたら、うれしそうな顔をしてくれた。その時、わたしはこころがポカポカして、とてもうれしかった。

わたしはへん見で人をきずつけないでいい。A君やしょう害のある人の笑顔をこれからも見たい。だから、もっとしょう害について知りたいと思った。しょう害を知るためには、もっとしょう害のある人と関わるのが大切だと思う。そのために、人を見た目で判断せず、どんな人とも積極的に関わっていききたい。



最優秀賞 中学生の部

「自分がされたら、相手にしたら」



境川中学校 3年 八十田 実優

「いじめ」という言葉。私は耳がこの言葉に慣れてしまうぐらい何度も聞いた。テレビのニュースでは、「いじめ」によって自殺した私と同じくらいの年齢の子の報道がよく流れ、学校では「いじめ」の授業が行われる。いじめが悪いことなのはきっとみんな知っている。それでも無くならないのは、「からかい」との境界が分からないからなのではないかと思っていた。しかし、本当は「いじめ」と「からかい」の境界なんかどうでもよくて、当たり前のことのできていなかったからだ。

私は今まで、自分の身の周りで起こったいじめを見てきた。時には、一緒になって嫌なことを言うてしまうこともあったし、逆に勇気を出して先生に相談したこともある。どんないじめも最初はただのからかいだ。それがどんどんエスカレートして、どんどんささいなことが大きくなっていじめになる。でも、それがいじめであることに気付けない人がいるから、ただのからかいの延長だと思ってしまうから、いじめは無くならないのだ。私もその中の一人だった。クラスの一部の子がある一人の子のことを笑っていて、その子のことを悪く言うこともあれば、わざと怒らせるようなことを言うこともあった。私はその場面を見て、その「ある一人の子」が可哀想だと思った。きっと嫌な思いをしているだろうと思った。でも、そのクラスの一部の子はただのからかいをしているように楽しそうに笑っているし、クラスの他の子も笑っていてただのからかいと一緒になのかと思ってしまった。むしろ、その場で「いじめ」という言葉を出したら周りの子に何を言われるか分からない。もしみんなにいじめじゃないと反論されたら、私は何も言えない。そんな不安と怖さがあった。「いじめ」と「からかい」の境界が何なのか、そして、それが分かったとして、自分は立ち向かえるのか、私はそれが分からなかった。

しかし今、私は「いじめ」や「からかい」といった名前にこだわって、その境界線を探すことよりも、何が一番大切か分かったような気がする。それは、自分がされて嫌なことは人にしないことだ。きっとこの言葉は、ほとんどの人が何度も聞い

たことのあるフレーズだと思うし、正直、いじめといえばこの言葉もセットで出てくるから、当たり前のように普通に聞き流していた。でも、やっと今になって言葉の意味をちゃんと理解して、実感することができた。

私は、嫌な思いをすることがたくさんある。そのほとんどが学校での友達との関係のことだ。別に何かをされたわけではない。でも、何気ない会話の中で嫌な言葉を言われたり、嫌な態度をとられたり、一人だけ仲間外れにされたり、その子にとっては冗談なのかもしれない、周りにとってはただのからかいなのかもしれない。でも、私はその子達のことを好きになれなくなった。たとえ冗談でも、その子達のその行動に傷付いたからだ。きっと、嫌な思いをするのは私だけじゃないと思う。みんな、一度は傷付いたことがあると思う。自分が傷付いたときに、どんな気持ちだったか、相手に対しても考えてあげられることができたなら、それを行動として移せたら、それで充分なのではないだろうか。だから私は、自分がされたら傷付くことは人にはしないようにしようと思う。本当に当たり前なことだけど、行動として完璧にするのは難しい。しかし、大切なことだからこそ当たり前にはやらずにはいけないんだと思う。

「いじめ」が無くならないのは、きっといじめかいじめじゃないか分からない人がいるからだ。でも、大切なことはそこではない。「いじめ」だって、「からかい」だって、同じことだ。周りにとっては、小さなことなのかもしれない。冗談のつもりなのかもしれない。でも、それを受けている人にとって、それが辛いことだったら、苦しいことだったら、傷付くことだったら、周りがそれをどう思おうと、いけないことなのだ。やっちはいけないことなのだ。やっちはいけないことを未然に判断するのは自分自身だ。自分がされて辛いこと、嫌なことを人にしてはいけない。当たり前なことを当たり前にならなければならぬ。いじめはなくなるだろう。

